

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第十四回

島の陽気なお寿司屋さん

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 十四回 島の陽気なお寿司屋さん

英国領バージン諸島に本拠を移す決断の時、夫が「大問題がひとつある」と、寿司屋が1軒もないことを指摘した。家をつくってあげるからと約束して、一件落着。

しかし、いざ引越して途方にくれた。カリブ海の魚はシガテラという恐ろしい食中毒をおこす。珊瑚礁近海には毒素を持つ渦鞭毛藻というプランクトンが多く、食物連鎖の生体濃縮作用で魚類の体内に蓄積する。生はもちろん、煮ても焼いても食べれない。

約束は約束、菜食主義の寿司をと張り切ったが、それも大変だった。カルフォルニア産の日本米や米酢は手に入っても、みりんと昆布がない。シャリは工夫とごまかしで。具はアボカド、熱帯きゅうり、マンゴーなど。海苔もないから、ちらしやカリフォルニアロールで我慢して、せつせと作った。たまに近くの仏領の島からフランス製の雲丹やいくららの瓶詰めが入荷すると、大騒ぎ。まるで宝石を寿司にするような気分になった。

そんな島のことだから、ヨットクラブで週1回、寿司屋が開店するとのニュースに仰天した。巻き寿司中心のメニューで、魚は冷凍鮪に真空パックの鰻の蒲焼きくらいしかない。が、とびっこやいくら握り、枝豆のおつまみ、海老や熱帯野菜の天ぷらもある。

起業家は小学校の先生で、冷凍魚類の輸入会社も経営する。島民の単純な食生活に少しでも変化をと一心発起し、始めた。寿司はずぶの素人で「食べたこともなかったわ」と、笑う。

彼女の社会起業家精神と勇氣に感じ入って、応援を始めた。美味しいご飯の炊き方や、合わせ酢のかげん、シャリ切りの方法、厚焼き玉子の作り方など、手とり足とり伝授した。

商売繁盛で嬉しい悲鳴をあげるまでに成長したが、味が理由ではない。客も働く人も同様に、週1回の開店が待ち遠しいほど、陽気で楽しい寿司屋なのだ。

人種も本職も様々な人がパートで働く台所は、チーム精神が浸透。和気あいあい、それが客にも感染する。

毎週、本物のチームに感動しながら、チームという概念がグループ活動と同されやすい現実を悲しく思う。働くグループ（▼印）とチーム（▽印）の性格を比べてみるとよく分かる。

▼グループは強いリーダーに率えられる。

▽チームは状況に応じてリーダーシップを分かちあう。

▼グループは個人が責任を負う。

▽チームは、誰の間違いでも、全員が共同責任を快く負う。

▼グループの目標は、指令されるか、所属する組織の目標と同じ。

▽チームの目標は、チームが自発的に設定し、行動に移す。

▼グループは各々個人が成果を納める。

▽チームは個人別の成果に執着せず、全員が共同成果を納める。

▼グループは能率的に会議を進行する。

▽チームは幅の広い開放的な議論と、活発に問題を解決する会議を促す。

▼グループは、外部への影響力を介して、間接的に業績をみる。

▽チームは、共同成果を直接評価して、業績をみる。

▼グループは、議論をし、結論を出しても、実行は委任する。

▽チームは、議論をし、結論を出して、自ら実行に力を合わせる。

▼グループは礼儀正しい議論を好む。

▽チームは率直で正直な会話を好む。

▼グループはただ黙々と働く。

▽チームは仕事を楽しみ、笑いが途絶えない。

▼グループは必要だから集まる。

▽チームは仲間との集いを待ち遠しく思う。

島の陽気なお寿司屋さんへ、母国の内閣と官僚を案内したい。チームの魅力に取りつかれたら素晴らしい国づくりができるのに……。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇九年五月十一日付の電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。